

周作人詩話 二

松岡俊裕

赤壁の淵瀬も埋まり 淀みつつ

名も徒に 人なき舟の 漂える

とどめきも 炬とともに断え

悲風さむく

英魂 内に遊ぶは 数知れず

〔紅樓夢〕 伊藤漱平訳

光緒二十五年（一八九九）の詩作で現存するのは前回（一）の最後に紹介した「春雨」と「天官風箏」の二首のみである。この二つの詩に於て自身の学力不足に対する反省の念と勉学への新たな決意を示した周作人は、引き続き寿家の三味書屋で師の寿鏡吾について勉学に励むことになる。寿鏡吾は介孚公とともに早期の周氏三兄弟（魯迅、周作人、周建人）に学問の在り方や学問をすることの意義を教えた人として忘れてはならない存在である。

同年十月二日、前年の暮に実施された県考（会稽県）と府考（紹興府）に及第していた周作人は（いずれも成績は芳しくなく、前者は第十回第三十四名〔全十一回〕、一回は五十名、兄の魯迅は第三回第三十七名）で後者は第四回第四十七名（会稽人は全十回、魯迅「替え玉が受験」は第八回第三十名）であった）秀才（生員）になるための最終試験たる院試受験の登録をすませ、同月五日に受験したが、

成績は奮わず落第した。一族では三年前に亡くなった周作人の父親の伯宜公と同世代の仲翔公（官名は開山）だけが最下位の第四十名をもって秀才に及第した。いわゆる八股文を試験問題として課するのはこの年が最後で、翌年から八股文に代わって策論が課せられることになる。

この周作人にとって始めての秀才試験に落第したことは彼に小さからぬ打撃を与えたとみえ、恐らく気持ちを新たにするためであろう、同月三十日に杭州の府獄に収監されている祖父の介孚公に手紙を書いて一字名に改名してくれるように依頼するとともに（介孚公はなぜか一字名ではなく二字名、奎授〔皇帝への奏薦と皇帝の裁可を経て位に叙する旨記した文書を授ける意〕をつけた。旧名の槐寿と音が同じ）、同日の日記に「またたく間に仲冬〔十一月〕になるうとしてゐる。學術に進歩がみられないままに年をとろうとしてゐることに、思わず恥入った」と書き記した。

祖父の介孚公に直接指導してもらうために杭州行を思い立つのは十一月十二日のことである（同日の日記「突然とつびな考えが生じた。明春省都〔杭州〕に行こうと思ふ。長兄〔魯迅〕が帰つて来てから相談することにする。長いこと杭寓〔介孚公〕から手紙が来ない。心底手紙が待ちどおしい。三味書屋での勉学はこの年限りであり（卒業は十二月五日）、その後一人で勉学し続けるのに不安を

抱いたのであろう。周作人が学問の師として介孚公を慕っていたことを裏づける事実である。

一方、介孚公の方も周作人の勉学に関心を寄せており、十二月十五日に周作人に宛てて開学間近の杭州の求是学院の受験を勧める手紙を出している。周作人はこの手紙を十七日に受け取り、同日の日記に手紙の内容を記している。それによると、求是学院は中国と西洋の学術を併わせて学び、それぞれ教師を招く。在學生は日に粥飯を一度、米飯を二度食べることができ、お菜も上等であり、毎月三、四元の奨学金が貰える。それに他の学院も同時に受験できる。翌年正月二十日が試験日で、募集定員は六十名であった。介孚公はこの手紙の中で「もし上級学校に進む気があるなら、できるだけ受験するように」と、求是書院の受験を強く勧めた上、帰省する途中自分の処に立ち寄った魯迅に『浙江求是書院規定』を持たせているが、周作人は結局求是書院を受験しなかった(『周作人日記』や『知堂回想録』など当たるべき資料全てに当たってみたが該書院受験を裏づける記述は見当たらなかった)。受験しなかった理由は定かでないが、恐らく学力に自信がなかったためと思われる。周作人は、介孚公の手紙を受け取った十八日と翌日の十九日、それに翌々日の二十日に計三通介孚公に手紙を出している(最後の手紙は十八日付の介孚公からの来信への返信)。これらの手紙で周作人は求是書院を受験する意思のないことを伝えるとともに、入るための試験を課さない書塾を紹介してくれるように頼んだのであろう、翌年の正月六日、介孚公は杭州の養正書塾の規定と一族の椒生公に保結(他人の身分などを保証すること)を依頼する手紙を周作人に寄せた。周作人は同月十日にこの手紙を受け取ると直ちに返信をしたため、同日夜に受け取った椒生公からの返信(二枚あり、うち一枚が保証書と

思われる)とともに翌日介孚公に宛てて発している。

最終的に周作人がこの養正書塾で学ぶことになったのか否かということは分からないが、ともかく周作人は杭州で勉学することになり、翌年の三月、杭州に行く準備を終え、同行の下男、阮元甫が来るのを待つことになった。同月二十一日、阮元甫が来たが折からの連日の大雨のため川が増水し、危険であったため、周作人は暫く杭州行を延期することにした。四月二日、介孚公宛てに同月六日に阮元甫を迎えに寄越すようにとの手紙を出したが、当日になっても阮元甫は姿を見せず、翌日も待ったが来なかったため杭州行を断念した。介孚公は、なぜこの時になって阮元甫を迎えに差し向けなかったのであろうか。この年の春に一段と猛威を奮うようになった義和団の動きを腕んでの配慮であったかもしれないが、これも確かなこととは分からない。

四月六日、周作人はこの年(光緒二十六年(一九〇〇、庚子))の日記(『蛭園日記』)の冒頭に「題辭」を書き加え、その冒頭に次に引く「定遠の方子真先生潯頤の旅店感懷一律」を書き記して自らを励ましている。方潯頤は清の道光年間の進士で、安徽省鳳陽府定遠県の人。子真は字。官は四川省の按察使に至る。書斎を二知軒といい、著に『二知軒文集』がある。

征途迢遼赴名場 征途迢遼として 名場に赴く

北去風雲送雁行 北に風雲去りて 雁行を送る

出処未知衿小節 出処 未だ小節を衿ぶを知らず

遠游何以慰高堂 遠游 何を以てか高堂を慰めん

心存遠歩方能進 心を存し歩みを退めて方に進む能ふ
 學到柔時即至剛 學びて柔に到れる時 即ち剛に到る

歴尽崎嶇増壯志 歴く崎嶇を尽くし 壯志を増す
 不須惆悵在他郷 惆悵として他郷に在るを須ひず

この詩は、迎えに来るものとはかり思っていた阮元甫が姿を見せず、意気消沈したものの、思い直して故郷で勉学することにした周作人の心境を実に適切に代弁してくれていると言えり。

さて、この光緒二十六年（一九〇〇）の詩作で現存するのは二篇のみである。そのうちの一首は、翌光緒二十七年（一九〇一）二月十五日の日記（『周作人日記』）に「庚子〔光緒二十六年〕の旧作」として書き留めた「鴛鴦」である。筆名は躍劍生（周作人の号の一つ）。この筆名は兄魯迅の号、戛劍生（最初の使用例は光緒二十四年〔一八九八〕に書いた「戛劍生雜記」）に対するものと思われる。本詩が筆名躍劍生の最初の使用例である。

⑦ 鴛鴦（七律） 躍劍生

素書伝後洗秋翎 素書を伝へし後 秋翎を洗ふ
 華表帰來客姓丁 華表より帰り来りて 客 姓を丁といふ

私翅身初離鮑肆 翅を払ひて 身初めて鮑肆を離る
 帶腥名合考禽經 腥を帯ぶれば 名を合はせ 禽經を考ふ

枯魚羽化胎都換 枯魚羽化し 胎 都て換はる

朽質奇呈骨亦靈 朽質奇を呈し 骨も亦靈なり

水擊鷗鵬差仿佛 水を撃ち 鷗鵬に差仿佛る
 專車變幻說南冥 專車變幻し 南冥を説ぶ

標題の「鴛鴦」は干し魚の鰓形をしたものを言う。鴛は鰓の俗字。『本草綱目』「鰓魚」に「集解、時珍曰く、頭上に骨有り、之を合はせるに鰓の鰓形の如し、乾せし者之を鰓と謂ふ、吳〔江蘇省の古名〕人之を嗜む、と」とある。「素書」は手紙のこと。古人が素（白絹）に手紙を書いたことに基づく。鴛鴦が手紙を届けるというのは、後漢の蔡邕の樂府「飲馬長城窟行」中にみえる「客遠方より来りて、我に双つの鯉魚を遺る。児を呼びて鯉魚を煮らしむるに、中に尺素書有り」という話に依る。この手紙は一体誰からのものなのか。『周作人日記』を見た限りでは、恐らく光緒二十六年三月十八日に周作人が受け取った南京に遊学中の魯迅からの手紙と察せられる。日記中の関連箇所を次に引いてみる。

〔烏石頭に墓参りに出かけて〕帰宅すると向いの屠家の者が、ある人が江南〔南京〕からの現金入りの手紙を届けたが家の者が不在であったためすでに帰った、後日昌安門外の泰生旅館に取りに行くように、と伝えてくれた。明日、下僕の章に取りに行かせらうつもりである。〔三月十四日〕

金陵〔南京〕からの十八日付の手紙、銀貨四元、それに詩三首〔「別諸弟」、後出〕を受け取る。同級生に頼んで持ち帰って貰ったものである。〔三月十五日〕

同級生（原文は「同学」というのは、魯迅が当時学んでいた南京の江南陸師学堂附設の江南鉞山鉄道学堂の同級生で紹興人の丁耀卿（名は文耀）のことであろう。周作人が翌年八月に江南水師学堂を受験しに南京に行った際、下関まで出迎えてくれた人のうちの一人である。丁耀卿はその年の十一月に肺病で亡くなっている。日記には特に記されていないが、丁耀卿はこの時魯迅の手紙を届けるとともに江蘇省の名物鰻を土産に持参したものである。「秋翎」の秋はここでは季節の秋ではなく、白色もしくは老いた、のうちのいずれかの意味と考えられる。翎は、羽（鳥の羽）。翎には鳥の羽の他に矢筈、それに清代の有功者の官帽の飾りに着ける羽の意味がある。「華表」は、日本の鳥居に当たるもので、一般に宮殿、城郭、官衙、陵墓など大建築物の前に建てられた装飾用の巨大な石の門柱をいう。柱身には龍や鳳などの図案が彫刻されており、上部には花柄を彫刻した石板が横に架けられている。北京の紫金城（現在の故宮）前の華表が特に有名である。ここは墓前の門柱のこと。周家の祖墳のある烏石頭一帯は墓場になっており、墓場の入り口近くに華表があったか。あるいは周家の墓前に華表があったかもしれない。「丁」は前出の丁耀卿。なお「華表」と「丁」というと、晋の『搜神後記』に見える、丁令威という人が死後仙術を学び鶴に化して故郷に帰り、城門の華表の柱に止まったのち天に昇ったという故事（「華表鶴帰」）のことが思い起こされる。「払」は振るうこと。「翹」は翼。「鮑肆」は塩漬けた干し魚を売る店。「腥」は、魚の生臭いこと。「考」は、調べる意。「禽經」は、鳥の種類などについて記録した書。全七巻。「枯魚」は、ひからびた魚、つまり鰻鶴のこと。天津人民出版社の『魯迅研究資料』十（一九八二年十月）所収の『周作人日記』では魚が画になっているが、画では意味

が通じない。日記原本のコピーを見ると、第三句の鮑の字の魚偏によく似ている。ちなみに長沙の岳麓出版社の『知堂雜詩抄』（一九八七年一月）では不明字扱いになっている。「羽化」は、蛹に羽が生えて成虫になること。転じて、人体に羽が生えて仙人になるなどの意味がある。「胎」は、腹ごもり（腹の子）、なかご（腹ごもりのように物の中に包まれているもの）をいう。「都」は、全て、すっかり、の意。「朽質」は、腐った体。「奇呈」は、珍しい形状を呈している、の意。「靈」は、靈妙の意。「差」は、いささかの意。「仿佛」は、まるでこのようだ、の意。「鵬鷗」は、鶴に似た大鷗と『莊子』の「逍遙遊」篇の中に出てくる北冥（北方の大海）の大鷗が化した大鳥。鷗はその後、南冥（南方の大海、天池）に向かう。「専車」は、車に一杯になるほど大きいものこと。「変幻」は、幻のように忽ち現われ忽ち消えて色々に様子が変わること。

鰻鶴を同じ題（「鰻鶴」）で詩に詠んだ先人に明末清初の呉偉業と清初の尤侗がいる（いずれも江蘇省の人）。尤侗の詩の方は遺憾ながら見つけることができなかった。呉偉業の詩は次の通りである（『梅村家藏箋』所収）。

画賛 鰻 鶴（七律）

丁令帰来寄素書 丁令 帰り来りて 素書を寄す
羽毛零落待何如 羽毛 零落し 何如するを待つ

雲霄豈有飾精計 雲霄に 豈に飾を飾ふ計有らん
飲啄寧聞逐臭余 飲啄 寧ぞ臭余を聞ざし逐はん

雪比撒塩堆勁翻 雪は塩を撒くに比て勁翻を堆ぬ
蟻旋封埵附專車 蟻は封埵を旋らし 專車に附く

秦皇跨鶴思仙去 秦皇 鶴に跨り仙去するを思ふ
死骨何因葬鮑魚 死骨 何に因りてか鮑魚を葬る

吳偉業はいわゆる江左の三大詩人の一人で、迫られて一時清朝に仕えたことを終生悔やみ続けた明朝の遺臣である。周作人がこの吳偉業の詩に着想を得て自ら同題の詩を詠んだことはまず疑いのないところであろう。(8)尤侗も吳偉業の詩に着想を得て同題の詩を詠んだものと思われる。

周作人は墓参りから帰った日に、南京から帰郷した丁耀卿が魯迅の手紙などの他に鶯鶴を届けてくれたことから「華表鶴婦」の故事や「華表鶴婦」の故事を踏まえた吳偉業の詩を想起し(あるいは筆者未見の尤侗の「鶯鶴」詩をも想起したやもしれぬ)、さらに『莊子』の「逍遙遊」の中の話を連想して興が生じ、それらを全て織り込んで本詩を作ったのであろう。

それにしても本詩は正に『莊子』の世界の如く渺茫としており、結局のところ作者が本詩において表現しようとしたものをしかと捉えることができなかつた。周作人にはすでに見てきたような比較的分かり易い詩が多く、このような虚と実とが入り混じった、作者の想念を飛翔させた難解な詩は珍しい。実に謎めいた詩である。識者の御教示をお願いしたい。

ちなみに、周作人には鶴にまつわるエピソードがある。周作人はかつて、丹毒を患っていた同郷の人に「傲慢であり鶴のようだ」と

言われたことがある(『談虎集』所収「文士と芸人」)。周作人はどうやらこの同郷人の指摘を随分気にしていたらしく、後年「鶴生」という筆名を用いるようになった。だとすると鶯鶴は周作人自身ということになり、彼は本詩において鶯鶴に託して自分の思い、鳥となって天空へ飛び立つが如く、大きく飛躍したいという願いを表現しようとしたとみられないでもない。さらに想像を逞しくすれば、実際に夢に見たことを詩に表現したとも考えられる、その夢は或は白昼夢であったかもしれないが。ただ問題はいつ鶴のようだと言われたのかということである。筆者の推測はその時期が本詩制作前であることを前提にしており、その時期が本詩制作後だとするとこの推測は意味をなさなくなる。

訳 鶯 鶴

手紙を届けてから 鳥は自分の羽毛を洗い清めた
墓から帰って来ると 丁という客があったという

翼をはばたかせて 鳥は初めて干し魚屋を離れた
鳥は生臭く あれこれ名を考え『禽經』も調べた

枯れた魚に羽が生えて すっかり生れ変わったのだ
腐った体は奇妙な形をしており 骨も真に靈妙だ

水面を撃って飛び立つ まるで鴨や鴈のようだぞ
車一杯になるほど大きく 千変万化 南冥を喜ぶ

さて、この年の秋にそれまでとはうって変わって科挙の受験勉強に身を入れて取り組んだ周作人は（杭州の介孚公が手紙で文題、論題、詩題を周作人に示し、後日周作人が解答を送るという方法で周作人は介孚公の指導を頻繁に受けた）、同年十月十七日に県考受験の登録をすませ、同月から翌十一月にかけて県考を受験した。第二回第三十九名という比較的良好成績で県考に及第した周作人は、引き続き同月十五日に府考の受験登録をすませ府考を受験した。府考の最終的な成績は第三回第三十四名であり、前年の成績よりはよくなったものの、一緒に受験した一族の地叔には及ばなかった。いずれにせよ、この成績のままでは翌年の十月に実施される院考に及第して秀才になれる可能性はなかった。

ところで、この冬、魯迅はなぜか予告なしに帰郷した。府考の最終試験が終わってから数日後の十二月一日のことである。この日はたまたま周作人の誕生日であった。「明け方に突然戸を叩く音が聞こえた。慌てて起きて見ると長兄が江南から帰宅したのだった。望外の喜びである。」（同日『周作人日記』）。自分の誕生日に合わせるかのように前触れもなく兄の魯迅が帰郷したことに、周作人は驚くとともに欣喜羅如した。

十二月二十四日は竈の神が昇天する日である。中国の旧習では当日あるいは前日の二十三日に竈の神を送る祭をすることになっており、紹興では二十三日に竈の祭をする習わしであった。同日の夜、周家でも竈の祭をしたが、その際魯迅は五言絶句「庚子送灶即事」
 （「庚子 灶〔竈の俗字〕を送る 即事」を作った（筆名は戛劍生）。「即事」とは、事に即して即興で詩を作る、という意味である。

隻鷄膠牙糖 隻鷄と膠牙糖

典衣供弁香 衣を典^とれ^して弁香^を供^ふ

家中無長物 家中に長物^{無し}

豈独少黄羊 豈独^り黄羊^を少^くの^みならんや

周家はこの時すでに、祖父介孚公の起こした科挙不正事件及び事件の跡始末に奔走したことによる父親の伯宜公の発病と病死のため没落しており、隻鷄（一匹の鷄）、膠牙糖（竹の葉で包んだ柔らかい餡菓子。元宝糖、墮貧糖ともいう）、それに弁香（花卉の形をした香）などの安価な品を用意するのにさえ着物を質入れしなければならぬほどであった。家に長物（贅沢な物。無用の長物）がないとは、めぼしい物は全てとうに質入れしてお金に換えてしまった、という意味である。従って、台門（お屋敷）の家柄の家が竈の神を祭る際に必ず用意することになっていた高価な黄羊（紹興では羊の頭を用いた）は用意できず、鷄で間に合わせたのである。黄羊を用意できなかったのはこの年だけのことではなかったであろう。周家の家長として魯迅は自ら質屋に行き、祭の供物を買って整えねばならなかった。

この詩に和して周作人は次の詩を詠んだ。筆名は別号の一つ、査菴子（別号の査菴山人のヴァリエーション^山）。なお、査菴子の筆名としての最初の使用例は、集句の第一作「菩薩蛮 夏目邸居」（詞）である。

⑧ 和庚子送灶即事（五絶） 査菴子

角黍雜糗糖 角黍に糗糖^を雜^へ

一尊臙酒香 一尊の臙酒 香る

返嗤求富者 返し嗤ふ 富を求めんとする者の
歳歳供黄羊 歳歳 黄羊を供ふるを

「角黍」は、粽。真菰の葉に糯米を包んで蒸した物。「猓糖」は獅子の形をした砂糖菓子。「一尊」は、ひと樽。「臙酒」の臙は、臘の俗字。臙酒は、臙月（陰曆十二月）に醸造される紹興酒。

甕の神への供物は、僅かに鶏、膠牙糖、弁香の他に粽、猓糖、それにひと樽の臙酒にすぎないが、酒の香が辺り一面に漂い、気持ち豊かにしてくれる。たぶん黄羊を用意できないことを、一族の者などに嘲笑われたのであろう。さぞかし兄弟はくやしい思いをしたに違いない。しかし、そうした他人の嘲笑に対して、兄弟は決して萎縮することなく、却って彼（或いは彼ら）が昔からの言い伝えを信じて金持ちにならうとすべく毎年黄羊を供えることを笑ったのである。

訳 「庚子 灶を送る 即事」に和す

我家には 粽もあるし猓糖もある
臙酒の香りも 辺りに漂っている

笑い返す 富を手に入れんとして
年年歳歳 甕に黄羊を供える者を

この魯迅の詩と、それに和した周作人の詩はいずれも当時の周家

の生活の厳しさを背景に詠まれており、厳しい生活にめげることなく生きていこうとする兄弟の心情がよく窺える詩である。

魯迅は翌年の正月二十五日、旅装を整え杭州經由で南京に戻って行った。同日の夕方、周作人は杭州の手前の西興鎮に向かう夜航船の船着き場（紹興の街のはずれにあった）まで兄を送ったが、その際集句（詞）「菩薩蛮 送戛劍生往秣」を作って魯迅の旅立ちを見送った。集句というのは、古人の句を集めて作った詩（詞）のことであり、周作人は前年からこの年にかけて合わせて十二首の集句（詩六、詞六）を作っている。集句は純粹な自作詩（詞）とは言えず、拙文ではいちいち取り上げないことにするが、参考のためにこの「菩薩蛮 送戛劍生往秣」だけを紹介することにする。これは周作人の第二作目の集句である。

菩薩蛮 戛劍生の秣に往くを送る（集句詞） 之江杳菴山人

風力漸添帆力健（陸游） 風力漸く添ひ 帆力健なり
蕭条落葉垂楊岸（李紳） 蕭条たる落葉 垂楊の岸
人影夕陽中（高翥） 人影 夕陽の中
遥山帶日紅（唐太宗） 遥山 日を帯びて紅なり

齊心同所願（古詩十九首） 心を齊しくし 願ふ所を同じくす
努力加餐飯（岑參） 力を努めて 餐飯を加へよ
橋上送君行（張籍） 橋上にて 君の行くを送る
綠波舟楫輕（鄭獬） 綠波に 舟の楫輕し

「菩薩蛮」は、詞の曲調の一つ。「秣」は、秣陵の略称。秣陵は

金陵、つまり南京のこと。「之江」は、浙江（杭州湾に注ぐ銭塘江とその上流の富春江などを含む川の名）の別称。その曲折の形が之の字に似ていることによる。ここは浙江省という意味であろう。

第一句は、陸游（浙江省越州山陰県の人）が南宋の乾道元年（一一六五）の秋七月に、江蘇省鎮江府の通判（副知事）から江西省の省都南昌府の通判に転任する途中で詠んだ七言律詩「望江道中」の第五句。

第二句は、唐の天和年間の進士李紳（江蘇省常州府無錫県或いは安徽省亳の人）の七言絶句「無錫の芙蓉湖を却り望る」全五首中の第二首の第三句。「楊柳」は、枝垂れ柳。

第三句は、宋の高翥（浙江省紹興府余姚県の人）の五言律詩「春日の湖上」の第四句。「人影」は、魯迅の姿。

第四句は、唐の太宗李世民の五言樂府「重ねて武功を幸ふ」全三十句中の第十八句。

第五句は、古詩十九首の第四首「今日は良き宴会なり」全十四句中の第七句。

第六句は、盛唐の辺塞詩人岑参（河南省南陽府南陽県の人）の五言古詩「王大昌齡の江寧（南京）に赴くを送る」全二十四句中の末句。周作人は岑参の名のみを挙げていますが、この句は古詩十九首の第一首「行き行きて重ねて行く行く」の中にすでに見える（全十六句中の末句）。「餐飯」は、食事。

第七句は、中唐の張籍（安徽省和州烏江の人）の五言律詩「遠人（遠方にいる人）を思ふ」の第二句。

末句は、北宋の鄭獬（湖北省德安府安陸県の人）の七言絶句「僧文瑩の居する所の壁に題す」の第二句。「緑波」は、おおおおとした波。

いずれも別離や送別にまつわる詩である。周作人が用いた句だけに依拠して集句を理解するのでなく、同時にそれらの句を含む原詩のイメージを重ね合わせることによって、作者の兄との離別を惜しむ気持ちより深くそしてより細やかに理解することができる。このように、集句にはイメージを複合的に相乗させるといふ効果があり、詩句は原作者のものであるが、そのことによって生ずる新しい詩境は全く集句者独自のものと言って差し支えない。

訳 菩薩蛮 戛劍生が秣に行くのを見送る

風が次第に加わり 帆布の張りが力強くなった
岸辺には楊柳の樹が連なり 寂しげに葉が落ちる
夕陽の中に 兄さんの行んでいる姿が見え
遙かなる山波が 陽を受けて赤く染まっている

心を一つにして 同じ願いを抱く
きちんと食事をとり 体に気をつけて
橋の上で あなたが行くのを見送る
緑波の上を 船が揖さばきも軽やかに進んで行く

周作人の集句は周作人理解に是非とも欠かせないものであり、いづれ稿を改めて詳しく論ずることにする。

（待統）

註

※ 引用文中の「」は引用者註。

- (1) 名は鳳苞。仲翔は字。大排行は第二十三。同治十年（一八七二）六月六日生。当時二十九歳。伯宜公と高祖（祖父の祖父）を同じくする。ちなみに伯宜公の大排行は第十三。
- (2) 魯迅が『浙江求是書院規定』を携えて帰郷するのは十二月二十六日のことである。後述するように、魯迅が介孚公の許を訪れた時介孚公はすでに周作人に求是書院受験の意思のないことを知っていた筈である。それにもかかわらず規定を魯迅に持ち帰らせたということは、介孚公の周作人に該書院を受験させたいとする気持ちがある程強かったことを物語っている。
- (3) 名は慶蕃。仲翔公の父親。椒生は字。号は杏林。大排行は第十八。道光二十三年（一八四三）四月十九日生。当時五十七歳。光緒二年（一八七六）丙子科挙人。候補知県。魯迅が最初に籍を置いていた南京の江南水師学堂で漢文教師などを担当。魯迅や周作人などが該学堂に入学できたのは椒生公の尽力による。しかし考え方は保守的で学問もなく、魯迅、周作人に忌み嫌われた。
- (4) 後出の章福慶の妻、阮氏（慶太娘と言われていた）方の親戚。
- (5) 名は福慶。紹興府上虞県東浦の人。周家の忙月（繁忙期の常雇い）。
- (6) 魯迅の小説「故郷」に出てくる岡土少年のモデル、運水の父親。紹興魯迅記念館副館長の章貴氏は福慶の曾孫。
- (7) 張菊香、張鉄棠編『周作人年譜』（南開大学出版社、一九八五）も画としてある。恐らく『魯迅研究資料』所収の『周作人日記』の読みを踏襲したものと思われる。
- (8) 吳偉業が魯鶴を詠んだ詩にはこの「魯鶴」詩の他に「魯」と題する五言律詩がある。

- 旧俗漁塩賤 旧俗にては漁塩（よまぐら）賤しく
貧家入饑輕 貧家なれば 入る饑（うま）輕し
- 自慚非肉食 自ら慚づ 肉食に非ざるを
每飯望休兵 飯（い）の毎 兵を休むるを望む
- 余骨瘦何附 余れる骨に 瘦何ぞ附かん
長發臭有情 長き發は 臭ひに情け有り
- 腐儒嗟口腹 腐儒は 口腹をば嗟くとも
風髮負升平 風（かぜ）襲りて昇平を負はんとす
- (9) 不詳。
- (10) 周作人の誕生日は光緒十年十二月一日（一八八五年一月十六日）であるから、この時数えて十六歳。兄の魯迅は二十歳。
- (11) 蚕は蠶の古字。蠶には、木喰い虫、本のしみ（蠶魚）、蝕むなどの意味があり、ここは本のしみの意味。蚕籠山人（蚕籠子）とは、しみの喰った本の山の籠に住む（科挙の受験のために本の山に埋もれて勉強している）者の意味。しみは周作人自身でもあり、周作人には自らをしみに譬えた「嘲蚕」という自嘲詩がある（光緒二十七年「一九〇一」二月十五日作）。
- (12) 夜間定期船。夜間に航行するため、鳥籠船（イカサボリボート）ではなく白籠船（イカサボリボート）を使用した。
- (13) 『文選』の李善注は「願ふ所とは、富貴を謂ふなり」とする。周兄弟にとっての同じ願ひとは、彼らが光緒二十六年の除夕に書神を祭るために作った「書神を祭る文」の末尾にあるように、才能の花が開いて科挙に及第することであろう。